

■（９９）「相手のうそを見抜けるか」で試される力量と努力

日本人研究者がiPS細胞を世界で初めて患者に移植したという「特ダネ」が一転、報じた新聞社自らの検証で誤報と判断された。研究者のうその説明を鵜呑みにしてしまったとして、読者に謝罪した。うそを見抜けなかった「取材の甘さ」も指摘されている。

取材相手の話をどこまで信用するかは、記者の力量にかかっている。虚偽を見抜ける客観的な方法があればいいが、まずは自らの「蓄積」と「経験値」で判断していくしかない。別の取材で得たデータと矛盾はないか。角度を変えて何度も質問してみて、その答えに一貫性があるかどうか。そのうえで、取材を終えたら、その分野に詳しい複数の人たちにニュース価値を取材してみる。客観的な文書記録や過去の新聞記事があるならば、目を通してみる。考えられる確認作業は際限ない。何よりも取材内容の基礎的な知識は身につけておかないと、相手の話に疑問もはさめない。特に日進月歩の科学技術の分野はそうだ。

技術の進歩に遅れていたのは、他人のパソコンを遠隔操作して脅迫メールを送ったとされる事件の捜査も。報道も警察もミスは人権侵害に直結するので身を引き締めたい（山）